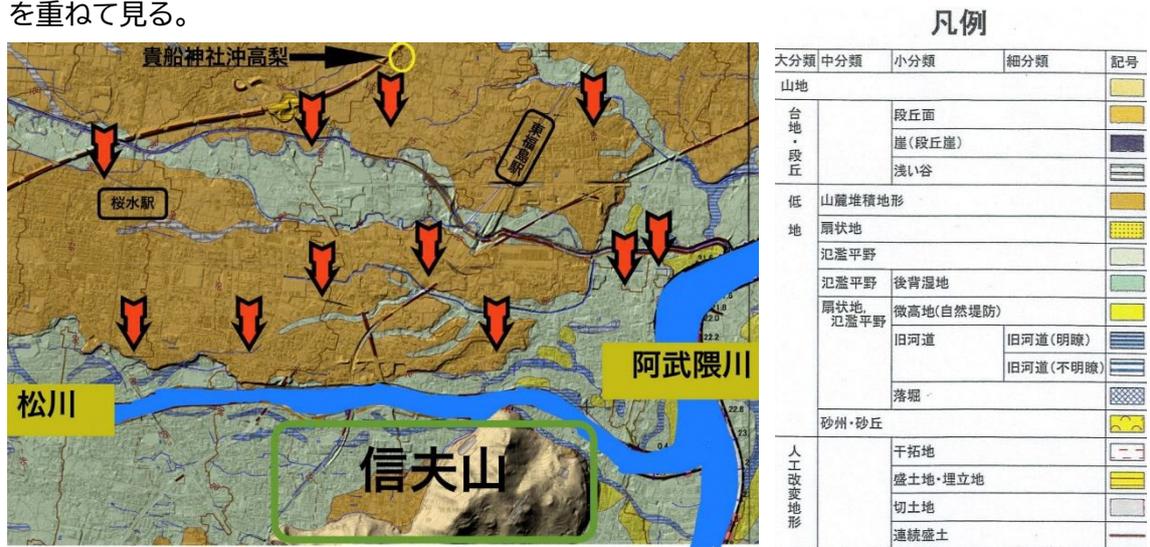


マッピング	地域名(大字など)	場所	表記	年号	形態	備考	
2025.1.19	北沢又	八計路傍	雷神	昭和七年	自然石		
		金福寺	雷	文化			
2025.4.27	笹谷	堀端路傍	雷神	明治九年			
	南矢野目	荒屋敷八幡神社		大正二年			
2025.5.4			八幡神社	文久二年			
2025.3.1	北矢野目	水雲神社	雷神塔	文政三年			
2025.5.4	鎌田	舟戸諏訪神社	雷神	萬延二年		正しい	
		鎌秀院					
	沖高	大荒神社		明治三十二年			
2025.8.4	平野	熊野神社		寛延元年			
2025.4.28	宮代	天神宮		文政			
2025.6.22	笹木野	熊野神社		雷			摩耗
2025.4.25	荒井	八幡宮		雷電神			明治二十七年
2025.4.4	岩手県遠野市	土淵栃内24地割		奉納雷神供養塔			調査不十分
合計					14		

なぜ「雷神」石碑は北側に多いのか

②考察Ⅰ 雨乞いとしての役割

→河岸段丘は水不足に悩まされていたため、国土地理院の地形治水分類図と「雷神」石碑分布を重ねて見る。



③考察Ⅱ 晴れ乞いとしての役割

→松川は、古くから暴れ川として知られており、現在の松川は信夫山の北側を流れているが、それは寛延十四年(1637年)の大洪水によるもので、それまでは萱場(笹木野村)の北方から八島田村と南沢又村との間を縫って一盃森の南を廻り、信夫山の南麓から現在の福島競馬場の北東隅を経て阿武隈川に合流していた。

→渡部一磨の高校である、福島県立福島高等学校は、かつての松川が作った河岸段丘上にあり、福島高校の前には、旧松川の名残とされる、祓川という小川が流れている。

→この洪水がきっかけで沢又村は松川によって分断され、現在のように北と南に分かれるようになった。(前ページ地図参照)

年	月	日	摘要
寛永十二年亥(一説に四四年)			松川信夫山北流となる
宝永三戌年八月			阿武隈洪水
享保二酉年			川欠
同 三戌年			松川落橋
同 七寅年			(起返し)
明和二年頃			阿武隈大洪水
安永二巳年			松川大洪水
天明二寅年七月			洪水
同 三卯年六月			洪水川欠、八反田川落橋
同 五巳年			川欠
同 六午年			川欠
同 七未年			川欠(土橋かけ替)
同 八申年			川欠
寛政二戌年			川欠
同 三亥年			阿武隈川洪水川欠
同 五丑年五月			川欠(いずれの年か丸子村冠水)
同 八辰年			川欠
同 九巳年			川欠
享和元酉年			川欠(阿武隈川起返し) 地図
文化六巳年七月			摺上川土橋落橋
文政七申年八月五日			大洪水
同 八月十三・十四日			松川洪水
同 某月二十六日			阿武隈川新川掘割(分流)
天保二卯年			洪水
同 七申年			洪水
同 七年			洪水(起返し) 地図
同 八年三月			(御山・五十辺・丸子境界争)
安政五午年			松川洪水
同 六年八月			(洪水後の築堤境界争) 地図
万延元年八月			阿武隈洪水
明治二三年八月七日			中通り台風通過
同 三五年九月二八日			台風
同 四一年九月三〇日			阿武隈、松川洪水、町丸子冠水
大正二年八月二六日			阿武隈川護岸改修
昭和六年			

阿武隈川・松川洪水史料

→阿武隈川と松川の洪水資料である。阿武隈川と松川の洪水は、当鎌田地区の最大の癌であった。

→頻繁に登場する「川欠」とは、洪水によって田畑が流出したことを意味するもので、「天明六年、川欠」とあるのは天明六年(1786年)の洪水による田の免引きの意である

→鎌田や丸子といったところは氾濫平野の後背湿地にあたり、何度も氾濫が繰り返されてきた。

摺上川も氾濫していた

→下飯坂の氾濫は藩も認めるほど
→「下飯坂の儀は、摺上川端にて当夏出水にて田畑欠損地になったので、高引の儀が願出された。見分の上、願い通高引にし、そのままに引き渡し申し候間、よろしくはからいたされたく候」と認めている。

阿武隈川・松川洪水資料
(福島市史別巻 VI 福島町の町と村 II より)

考察 I と矛盾するようだが、南矢野目も氾濫地域

→矢野目の「目」は氾濫が多かった証拠

→『続・地名語源辞典』(山中襄太)

①「そもそも地名に「目」が入るのはアイヌ語の mem(湖沼、湿地)、pet(水、川)の訛りがもっとも当てはまるらしい。」

②「他にはイエ(家、イハ)がイハ>イバ>ベ>メと変わった語だとの説もある」

→郷野「目」は??

『福島県の地名日本歴史地名体系7』

→「吾妻鏡」に登場する信夫庄司佐藤氏の一族の河辺太郎高経からきている。そしてこの「河辺」を「カウノベ」と読むため、これがなまって郷野目になったという。

④総合的考察 幕政下の飢饉と重税

第12表 北矢野目村年貢一覧表(年貢割付、年貢皆済目録)

年号	種別	高		本		途		合計(大豆の賦課は省く)		免	備考
		石	石	石	米	米	米	米	米		
寛文10	割	1,188.066 新田 8.899	627.552 4.701	131.204 543	18.744 77	134.382	34.289	52.8	三升口米、口永を含まず		
延宝3	同	1,028.801	298.754	149.377	21.340	152.365	38.288	29.3	同		
貞享2	同	1,028.801	309.005	154.501	22.072	157.591	39.451	30.5	同		
元禄3	同	1,028.801	315.343	157.675	22.524	165.559	41.143	40.2			
元禄13	同	1,031.858	325.168	162.584	23.226	165.836	41.125	32.1			
宝永5	同	1,031.858 加免 2.571	359.373 2.571	179.683 1.283	25.670	183.277 1.309	44.895 293	35.7			
享保3	同	1,031.858	422.035	211.020	30.145	215.240	52.110		合計には口米、口永を含まず		
享保9	同	1,031.858	424.716	212.358	30.336.9	217.224	52.415	41.9	同 この年より3年定免となる		
同 14	同	1,031.858	466.022	233.011	33.287.3	283.332	57.172	45.8	口永、三升口米は享保5年より、御伝馬宿は6年より		
同 18	同	1,031.858	296.026	148.013	21.144.7	151.008	31.704	29.2	同 13年より10年間定免		
元文5	同	1,031.858	424.630	212.315	30.330.7	217.259	52.477.6	41.6	同 林銭は13年より、信達農民一揆をおこす		
天明3	皆	1,031.858	122.408	61.204	8.743.4	63.047	21.431.1	11.9	同 19年は風水害で両方検見。		
同 5	割	1,032.188	115.736.5			118.670.5	33.779.3	11.2	同 早害のため、畑は定免、田は検見となる		
寛政5	同	1,032.188	269.451	134.725.5	19.246.5	142.801.5	38.962.1	29.1	同 この年より3年定免となる		
享和元	同	1,032.188	266.533	133.266.2	19.032.1	140.548.2	38.610.6	28.4	同 検見取		
文化10	同	1,032.188	269.943	134.971.5	19.281.6	142.338.5	39.000.7	26.2	同 天明の飢飢始まる。田高319石8斗余引(36.8%)		
文政6	皆	1,032.188		139.671.5	19.953.1	141.088.5	44.913.9	27.1	同 不作のため103石4斗余引、検見取—寛政中不作続きのため検見取となる		
弘化2	割	1,032.188	286.054.4.9	143.027.25	20.432.5	150.798.25	41.601.2	27.7	同 不作のため90石8斗余引、この年より足守藩領となる。		
安政5	皆	1,032.188		156.724.07	22.389.2	158.482.07	53.364.4	30.4	同 文化5年より3年間の定免をくりかえす。切替の度に1石~2石の増(文化11~13までは1石358の増)		
慶応元	同	1,032.188		156.724.7	22.389.2	158.482.07	79.666.1	30.4	同 外に粗1.279.2 廿分一御下穀、粗18石4斗新貯夫食		
同	同	1,032.188		141.136.78	20.162.4	142.583.78	51.260.3	27.4	同 同 25.584 貯夫食		

阿武隈川・松川洪水資料(福島市史別巻 VI 福島町の町と村 II より)

→この表をみるといかに享保の改革が農民の生活を圧迫したかが目に見えるだろう。寛文十年(1798年)の村高は新田を加えると1196石9斗5升5合で、古高と同じである。の当時の免が52.8%という高率であることは、農民収奪がいかに過酷なものだったかが分かる。

→享保に入ってから免が大幅に上がっている。特に享保年間には八代将軍吉宗の時代になると、免も四割を超し、雑税も多くなり、御伝馬宿入用代などの新税も設けられた。さらに今までの検見制よりも定免制がとられるようになった。

→この時代の年貢の取り方には二種類がある。

・検見法……その年の年貢の取れ高に応じて徴収

・定免法……取れ高は関係なく、毎年決まった割合分を徴収

そんな中飢饉が起きる

①天明の飢饉

→天明三年(1783年)は五月の田植時期より8月26日まで雨が降り続き、晴天となった日は7月に2日ほどあっただけで、しかもいつもは消えている吾妻の高山の雪も残り、さらには9月にはもう初雪が降ったという。松川・荒川・須川の各河川は、水田に冷水を流出させ、稲は青立ちで収穫皆無の状態になった。

→北矢野目には、「餓死地蔵」(左)と呼ばれる地蔵がある。この地蔵は、天明三年(1783年)九月に建立されていることもあり、そう呼ばれている。どうしようもない災害を何とかしようと、仏にすがろうとした民衆の思いがひしひしと伝わってくる。



②天保の飢饉

この飢饉は農民にとって天明の飢饉以上に厳しいものになった。天保七年(1836年)は4月以来太陽の光を見なかったといわれるほどで、気温は低く、農作物はことごとく発育が遅れ、米作はその成熟があやぶまれた。その年の夏、東国を相次いで暴風が襲い、ついに米の収穫は皆無となった。それにも関わらず、支配者は年貢の収奪をやめようとはしなかった。足守藩に替わると、3年ごとの定免を実施し、更新するときには1石~2石の増収割り当てが行われた。

(3)今後の課題

→福島市下野寺日枝神社の右の庚申供養塔には「学善院」と碑銘がある。

『福島市の文化財 福島市文化財調査報告書第23集』

(この庚申塔の形について述べたうえで)ただ、年紀の下に「祈願主 学善院」とあるのは面白い。学善院は、いわゆる法印であろう。

神仏両道を修する修験であればこそ、庚申を導きえたものであろうし、また、日枝神社に建立するのも当然といえるが、庚申講の営みが仏式・神式ともに行われたのは、こうした仲介者故と思われるからである。



福島市下野寺日枝神社
(梵字)庚申供養塔



→すべての石碑がこの庚申塔のように宗教者の存在を明記しているわけではないだろう。竹原万雄らが2022年に行った研究では、山形市蔵王上野の石碑の別当を、明治三年に上野村が作成した『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上戸張』をもとに調査している。このように石碑の宗教者の存在を調査しようとすると、石碑そのものの調査以上の調査が必要になる。それには古文書を読むことも必要だが、それ以前に古文書を手に入れることが必要である。今後の研究においては、こうした宗教者の存在を課題としたい。

研究こぼれ話③ 信夫盆地の石碑流行型の源流はどこ？

私は、石碑分布表を作成するにあたって、石碑の形を分類するために、石神裕之『近世庚申塔にみる流行型式の普及』という、東京都における近世庚申塔の研究論文から、近世庚申塔類型概念図を拝借して、その表を基に信夫盆地の石碑の型を分類していった。私はこの概念図を基に信夫盆地の石碑を分類していき、そして石碑分布表を作り上げたのだが、この概念図を使用して信夫盆地の石碑を分類していくと、そのほとんどが「自然石型」に分類されてしまい、この概念図を使って信夫盆地における通時的な流行型の変遷を判明することは難しいことが分かった。

この結果は、この概念図自体が、東京都における近世庚申塔の流行型を分類するために作成された概念図であることを再確認させるものになるとともに、逆説的に、信夫盆地の流行型の変遷は、東京都(江戸)の流行型の変遷とは、別系統であることを強く認める結果となった。

そのようなことを考えていると、春休み、茨城県の鹿島神宮横の稲生神社にて石碑調査をしたのを思い出した。その稲生神社には様々な石碑があったのだが、この神社の石碑の型はこの概念図にピッタリとあっていた。つまり、少なくとも、茨城県鹿島神宮付近の石碑の流行型と、東京都の流行型は照応していることが分かる。

では、信夫盆地の流行型の変遷はどのようなものなのだろう。そして、その変遷はどの地域と共通のもので、そしてどの地域から影響を受けたものなのだろうか。

石碑研究に終わりはない。

5 岡部・岡島・山口の石碑石仏について

(1)特徴

- ①「金毘羅」石碑が発見できなかった
- ②「釜神」石碑が発見できなかった
- ③古い庚申塔が多い



福島市山口お春地蔵(元禄三年)

(2)庚申塔について

福島市山口お春地蔵の庚申塔が、市内では一番古い(立て看板情報)
→ほとんど摩耗してしまっており、解読することは難しい。



福島市山口安洞院(元禄六年)

福島市山口安洞院(元禄六年)の庚申塔は唐破風付きの庚申塔で、正面左の青面金剛碑銘には、赤い染料が塗られている。



福島市岡部安洞院(宝永五年)
帰命青面金剛

(3) 渡部一磨おすすめ石碑石仏



← 岡島鹿島神社 庚申塔(文化十一年)

奇石を利用して、笠付型のような形態にしている。そのおかげで風化も免れ、碑銘はしっかり残っている。

山口小坂山神社 辨財天(延享二年)→
笠付のおかげで文字も風化せず、保存状態も非常にいい。全体のバランスも非常によく、小さな石碑が並ぶ中で、闊とした境内にひとり聳立する姿は、どこか涼しさを感じる。





6 お願

一時間半も付き合っただきありがとうございます。私は四月から信夫盆地を離れますが、この信夫盆地での石碑・石仏調査はライフワークとして、活動していきたいと考えています。

そこで、皆様に、お願いがあります。この信夫盆地における石碑・石仏調査はまだまだ未完成です。石碑・石仏が信夫盆地のどこにあるのか、まったくわからない状態での調査が今後も続くことでしょう。

そのため、石碑石仏がある場所・実際に信仰している人・団体をご存じでしたら、是非是非是非私に教えてください！！駆けつけます。お願いします。(お話聞きたいです！講にも参加したいです)

そして、石碑石仏をまったく知らなかった方も、ぜひ、この私の発表を機に石碑・石仏に興味を持っていただけたら幸いです。

石碑・石仏は現代社会では等閑視されている、ちいさな「いしころ」ですが、それに目を向け愛したとき、ちいさな「いしころ」は、何百年前から連綿と受け継がれてきた思いが詰まった「石碑・石仏」になる、と私は、考えています。



渡部一磨の連絡先

Google メール

nabebesann@gmail.com

Yahoo メール

nabebesann@ymail.ne.jp

※追記

その他の連絡先には福島県立福島高等学校(024-535-2391 福島県福島市森合町5-72)があります。ぜひ連絡してください。大学に提出した小稿書類はご希望があれば差し上げます。(枚数が300枚以上あるので、PDFでしかお渡しできません。無断転載はしないでください。)